



第15回 ヒカリものについて考える・その3

ウィンカー、ヘッドライトと続いたヒカリものシリーズ。
今回はブレーキランプについて ぐだぐた述べてしまうぞ。

その3・ブレーキランプについて

☆ ブレーキとは

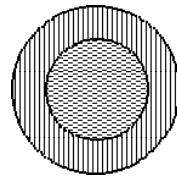
車は移動するための道具であるから、当然走ることが出来る。そして走るだけでは片落ち（NHK的表現）で、走っている車を止める必要もある。これがブレーキだ。そしてブレーキと連動して点灯するようになっているのが、制動灯（ブレーキランプ・以下ブレーキ灯）だ。

よってブレーキ灯が点いている車は、必ずその車が減速もしくは停車しようとしているということが言える。しかしその裏は言えない。つまりブレーキ灯が点いていないからといって、必ずしも その車が減速もしくは停車していないとは言えないのだ。具体的に言うと、走行中なら エンジンブレーキで減速することは日常行われていることだし、停車している車はパーキングブレーキで不動を維持できる。だからブレーキ灯だけで他車の状況を判断するのは難しいのだ。う～ん、のっけから堅いことを書いてしまったな。

☆ デザイン

ブレーキ灯は、車によって色々な形がありますね。夜間でもだいたいブレーキ灯を見れば、その車が何であるか判りますもんね。

個性豊かなブレーキ灯の中でも一番有名なのが、スカイライン。あの丸いブレーキ灯の伝統はこれからもずっと続いていくことでしょう。あの形を見てNHKの減点パパを思い出すのは私だけでしょうか。



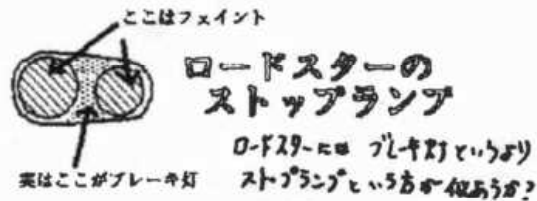
スカイラインのブレーキ灯

なぜか故・南伸介氏を思い出してしまう……

それから大昔のローレル。小さなランプが横に3個並んでいて、ブレーキを踏めばそれらが一齐に点いてブレーキ灯の役割を果たす。さらに昔の車はブレーキ灯がウィンカーも兼ねていたもので、ウィンカーを操作すると、3つのランプがリレーのようにずれて点滅し、曲がろうとする方向を表現する、という凝ったものだったのだ。



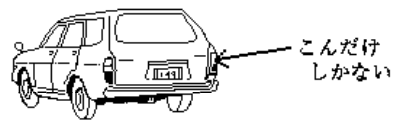
最近ではマツダのユーノスロードスターが面白い。スカイラインみたく赤丸が二つずつ付いているのだが、赤丸が光るとみせて実は光らず、そのあいだに挟まれた池田銀行のマークみたいところが光るのだ。



カリブというトヨタのバンも実に大胆。後部の引き上げドアを上から挟むように付いている。つまり後ろから見ると左上と右上にL時形の赤いランプが点くことになる。

☆ 設置場所

場所は、おおむね後面の高さは中央付近・端よりに、左右対称になるように付けられている。これは一番見やすい所なのでしょう。ただこれは一般の乗用車のことで、後ろにドアがあるような車やトラックなどは、そのドアの下または左右の、小さなスペースにランプが押し込まれている。特に軽トラはひどい。これは安全面では決して褒められたポジション・大きさではないと思うが、全ては経済性の問題なのでしょうね（その証拠にクラウンのバンなどには引き上げドア側にブレーキ灯が付いている）。



バンのブレーキ灯は小さいのだ。

高級な車ほどブレーキ灯は でかい！ これは軽自動車のつつましやかな義理ランプと、クラウンのどうだ参ったかと言わんばかりの大きなランプを見比べれば一目瞭然でありましょう。

後方からの視認性や後方への意思表示など大きい方が有利ですな。そういった安全面から言うと確かに大きなランプの方が良いと言えるでしょうが、あまり大きすぎるのも、後続車にすれば、眩しく、ウィンカーや窓越しの前方などが見づらくなるという点で評価は出来ないわけです。物事には程というものがあるわけで、それを忘れて「ただ立派にただ威圧的に」という今の高級車用の設計は気に入らないなあ。自動車そのものの技術的な部分は成熟しきってしまって、飾りで売らなくてはいけない御時勢なのではないでしょうか。

買う方も買う方だが。

☆ 前部にも欲しい

さてブレーキ灯の位置は後面のみというのは、おそらく車両法で定めてあるのでしょう。しかし私が思うに、前面にもブレーキ灯があっても良いのではないのでしょうか。いや、私はぜひ欲しいと思うのですね。

たとえば交差点で右折待ちをしているとしましょう。対向車がやって来ているが信号が黄色に変わる。さあ、対向車は突っ込んでくるだろうか、それとも止まってくれるだろうか……というような時、我々は対向車の速度を見極めて判断をせねばならないのです。しかしですね、ここでもし前面にブレーキ灯が付いていれば、少なくとも対向車の動向の判断が下しやすくなるのではないのでしょうか。ブレーキ灯の情報を鵜呑みにして右折するというのは危険ですけどね。



☆ 夜間の錯覚

夜間ドライブは、ブレーキの大きさと位置に起因する錯覚に陥り易い。

夜間は(当然だが)真っ暗であるため前方を走っている車を十分に視認出来ない。唯一光る尾灯・ブレーキ灯が、前方を走る車の全存在といっても過言ではないでしょう。ドライバーはそのブレーキ灯を見て、前者との距離をはじき出すわけですが、ここで錯覚が起こるのです。たとえば、軽トラとクラウンを並べておいて、それを後方から見たらど様に見えるでしょう。軽トラのブレーキ灯は小さく、位置も下の方にあり、なおかつ汚れて暗い。かたやクラウンのブレーキ灯は大きく、位置も上の方にあり、明るい。おそらく真っ暗な中で両車を見比べたら、クラウンの方が近く見えるのではないのでしょうか。

ここで問題なのは近くに見えるという事ではなく、軽トラが遠くに見えるということなのです。はるか前方に見える車がブレーキを踏んだから、まだまだ大丈夫と思ってゆっく

りブレーキをかけたなら、意外と近くて追突しそうだった、という経験はありませんか。

逆に高級車に近寄りたいたい感じがあるのは（車間を開けてしまう）、大きく明るいブレーキ灯に威圧されていたと言えないこともないでしょうね。

☆ ハイマウントストップランプ

以前も述べたようにハイマウントストップランプ（高い位置に付ける補助ブレーキ灯）は、安全面で有効な自衛手段だ。特に軽自動車やバンなどブレーキ灯の小さな車には必須アイテムと言えるでしょう。しかし こういった実用車ほど道具として使われているためか、あまりハイマウントが装備されていないというのが現実ですね。



逆にファッションとしての意味合いが強いためか、ブレーキ灯だけで十分な一般乗用車の方に多く装備されています。ブレーキ灯自身が、十分な大きさと高さを持つ車に、ハイマウントなんか付けられたんじゃ眩しくてしょうがないでっせ。

☆ キャラクターハイマウント

最近ハイマウントランプに 様々なキャラクターを用いたものが はびこっています。ウルトラマンから始まった人形化は、バルタン星人やらスノーマンやら、でっかい蟹やら、いろいろとヴァリエーションがあるようだ。まあこういうのを載っけて喜んでいるのは、20そこそこの若い男がほとんどであるわけで、御愛敬やね。しかし、そういう事では自己を差別化できないと言うのも情けない話じゃないですか。若もんのファッション志向とはそういうものなのだろうけどなあ。以前 スプリングの付いたでっかい手形が、多くの車のテールを飾ったように、いまウルトラマンが若 ^{ばかぐるま}車のテールで光っているわけだ。

しかしあと1年もすればブームは去り、後部ガラスから取り外され光を失った多くのウルトラマン達が、押入で隠居している姿が目につかぬ。滑稽な。